

## イネヒメハモグリバエ

水辺で活動するためイネミギワバエとも呼ばれる。本種は全国に分布するが、特に北海道、東北、北陸地方などの寒冷地で発生が多い。冷涼な気候を好み、5～6月に低温、寡照で経過した場合に発生が多く、高温期は発生がほとんど見られなくなる。

本県での発生は浜通りの海沿いや南会津が目立つが、近年は育苗箱施薬の普及により移植栽培では過去と比較して発生量は少なく推移している。また、直播栽培で被害が大きくなりがちで、生育初期に低温対策で深水にすると、生育遅延を引き起こすほどの影響を及ぼす。

### 1 発生生態

#### (1)見分け方

成虫は、全体が暗灰色、胸部背面は青銅色で、体長 2.7mm 内外の小型のハエである。卵は、長さ 0.7mm、幅 0.2mm 程度の乳白色の細長い円筒形で一端がやや尖っており、もう一端が丸みを帯びている。田植え後、水面に浮かんでいる葉の表面の葉脈に産み付けられるので発見しやすい。

幼虫は、体の色が乳白色をしたウジで、終齢になると 5～6 mm の大きさになる。

蛹は、黄褐色～暗褐色で長さ 4 mm くらいの紡錘形である（写真 1）。

なお、類似の被害を及ぼすものとしてはイネハモグリバエがある。イネハモグリバエの幼虫はイネヒメハモグリバエと違い、葉幅いっぱい摂食するため、被害葉は袋状になる。また、イネハモグリバエの幼虫は葉の外で蛹化する特徴があり、この点でもイネヒメハモグリバエと区別できる。

#### (2) 発生のようす

本種は年 4 回から 8 回発生すると見られている。越冬は大部分が蛹、一部幼虫でイネ科雑草の葉内で行われる。越冬世代成虫は 4 月から活動を開始し、水面を歩行しながらイネ科雑草の垂れ葉や浮き葉に産卵する。イネに対しては、移植直後から産卵を開始する。1 個ずつ葉の表面に産み付け、多いときは 1 葉に十数粒から数十粒にもなる。孵化した幼虫は 3 齢を経過した後、そのまま葉肉内で蛹化する。卵期間は約 5 日、幼虫期間は 10 日から 2 週間、蛹期間は約 1 週間、成虫寿命は約 2 週間である。なお、イネの生育の進んだ盛夏以降は再びイネ科雑草で生活する。

水田では 5 月上旬と 6 月上旬頃に成虫が発生し、幼虫による加害が見られる。孵化した幼虫はイネの表皮下に潜り、食害が進展するに従い不規則な白線状の食痕を残す（写真 2）。加害が激しいと株の全葉が褐変し、イネの初期生育を抑制する（写真 3）。特に、低温で苗が深水状態、活着不良の場合に発生が多くなる。

## 2 防除方法

深植えや田植え後の低温および深水管理は、本種の加害を助長する。そこで、移植後はなるべく垂れ葉や流れ葉にならないように浅水管理を行って活着を促進し、イネの初期生育が低下しないようにする。また大区画田では代掻きが均平でないで部分的に深水状態になり、局所的に多発する。

薬剤による防除は育苗箱施用、本田での茎葉散布、水面施用が有効である。



写真1 イネヒメハモグリバエ幼虫



写真2 幼虫の食害痕



写真3 被害が著しい苗